

樋口一葉

長谷川時雨

青空文庫

秋にさそわれて散る木の葉は、いつとてかぎりないほど多い。ことに霜月は秋の末、落葉も深かろう道理である。私がここに書こうとする小伝の主一葉女史も、病葉が、霜の傷みに得堪ぬように散った、世に惜まれる女である。明治二十九年十一月二十三日午前、この一代の天才は二十五歳のほんに短い、人世の半にようやく達したばかりで逝ってしまった。けれど布は幾百丈あろうともただの布であらう。蜀江の錦は一寸でも貴く得難い。命の短い一葉女史の生活の頁には、それこそ私たちがこれからさき幾十年を生伸びようと、とてもその片鱗にも触れることの出来ないものがある。一葉女史の味わった人世の苦味、諦めと、負け魂との試練を経た哲学――

信実のところ私は、一葉女史を畏敬し、推服してもいたが、私の性質として何となく親しみがたく思っていた。虚偽のない、全くの私の思っていたことで、もし傍近くにならば、チクチクと魂にこたえるような辛辣なことを言われるに違いないというようにも思ったりした。それはいうまでもなくそんな事を考えたのは、一葉女史の在世中の私で

はない、その折はあまり私の心が子供すぎて、ただ豪いと思つていたに過ぎなかった。明治四十五年に、故人の日記が公表おおよけにされてからである。私は今更、夢の多かつた生活、いつも居眠りをしていたような自分を恥じもするが——幾度かその日記を繙ひもときかけては止めてしまった。愛読しなかつたというよりは、実は通読することすら厭いやなのであつた。それは私の、衰弱しきつた神経が厭いとつたのであつたが、あの日記には美と夢とがあまりすくなくて、あんまり息苦しいほどの、切羽詰せつばつた生活が露骨に示されているのを、私は何となく、胸倉むなぐらをとられ、締めつけられるような切なさに堪えられぬといった気持ちがして、そのため読む気になれなかつた。

しかし、今はどうかというに、私も年齢よわいを加えている。そして、様々のことから、心を、少しずつ開かれ風流や趣味に逃げて、そこから判断したことあやまちの錯誤をさとするようになった。この折こそと思つて、私は長くそのままにしておいた一葉女史の日記を読むことにした。すこしでも親しみをもちたいと思ひながら——

で、お前はどうか思つたか？

と誰かにたずねてもらいたいと思う。何故ならば、私はせまい見解を持つたおりに、よくこの日記を読まないでおいたと思つたことだつた。拗ひねくれた先入観があつては、私はこの

故人を、こう彷彿ほうふつと思い浮べることは出来なかつたであらう。よくこそ時機のくるのを待っていたと思ひながら、日記のなかの、ある行にゆくと、瞼まぶたを引き擦こするのであつた。それで私に、そのあとでの、故人の感じはと問えば、私はこう答へたい気がする。

落ふきの匂においと、あの苦味

お世辞氣のちつともない答へだ。四月のはじめに出る青い落のあまり太くない、土から摘立てのを齒にあてると、いいようのない爽さわやかな薰かおりと、ほろ苦い味を与える。その二つの香味こうみが、一葉女史の姿であり、心意氣であり、魂であり、生活であつたような気がする。

文芸評に渡るようにはなるが、作物を通して見た一葉女史にも、ほろ苦い涙の味がある。どの作のどの女ひとを見ても、幽艶、温雅、誠実、艷美、貞淑の化身けしんであり、所有者でありながら、そのいずれにも何かしら作者の持つていたものを隠している。柔風やわかぜにも得堪えたえない花の一片ひとひらのような少女、萩の花の上におく露のような手弱女たおやめに描きだされている女たちさえ、何処にか骨のあるところがある。ことに「にぎり江」のお力りき、「やみ夜」のお蘭らん、「闇桜やみざくら」の千代子、「たま櫂だすき」の糸子、「別れ霜」のお高たか、「うつせみ」の雪子、「十三夜」のお関せき、「経づくえ」のお園——と数えれば数えるものの、二十四年から二十

八年へかけての五年間、二十五編の作中、一つとして同じ性格には書いてないが、その底の底を流れて、隠しても隠しきれない拗ねた氣質は、日記から読みとった作者の、どこか打解けにくいところのある、寂しい諦めと、我執を見逃されない。

私は一葉女史の作中の人物をかりて、女史に似通っている点をあげて見たいと思った。も一つは、どの作が作者の氣に入っていた作か知りたかった。それよりも深く知りたいたいの、どの作のどの女性が、最も深く作者の同情を得、共鳴のあるものかということであつた。最も高く評価されたのは「濁り江」のお力、「十三夜」のお関、「たけくらべ」のみどりであつたが、すべての女主人公を一固めにして、そして太く出た線こそ、女史の持つてゐるほんとうの魂だという事が出来るであらう。

「経づくえ」は小説としては「にぎり江」や「たけくらべ」に競べようもない、その他の諸作よりも決して勝れてはいない。その構想も『源氏物語』の若紫を今様にして、あの華やぎを見せずに男を死なせ、遠く離れたのちに、男が死んだあとで、十六の娘がその人の情を恋うという、結末を皮肉にした短いものである。けれども、その少女お園の心持ちは、内気な少女には、よく頷かれもし、残りなく書尽されてもいる。我と我身が怨めし

いというような悩みと、時機を一度失えば、もう取返し of つかない、身悶えをしても及ばないくらいがいいが、穩かに、寸分の透すきもなく、傍目わきめもふらせぬようにぴったりと、悔くというかたちもないものの中へ押込めてしまつて、長い一生を、凝じつと、消きえてしまった故人の、恋心の中へと突進つきめてゆかせようとするのを、私は何とも形容することの出来ない、涙と圧迫おさを感じずにはいられない。――動きのとれない苦しみを知る人でなければと思うと、私はお園の上から作者の上へと涙をうつすのであつた。

――私の書方かきかたは、あんまり一葉女史を知ろうために、急ぎすぎていはしまいか。

或る人は女史を決して美人ではないといった。また馬場孤蝶ばばこちよう氏の記するところでは、美人ではなかつたが決して醜い婦人ではない。先ず並々の容姿であつたとある。親友の口からそう極めきわがつけられているのを、見も逢いもせぬ私が、何故なぜ美人にしてしまうのかと、審いぶかしまれもしようが、私が作物を通して知っている一葉女史は、たしかに美人というのを憚はばからぬと思う自信がある。写真でも知れるが、あの目のあの輝き、それだけでも私は美人の資格は立派にあるといたい。脂粉いろに彩いろどられた傾けい国の美こくこそなかつたかも知れないが、美の価値を、自分の目の好惡こうおによつて定める、男の鑑賞眼は、時によつて狂いがない

とはいえない。あまりお化粧もしなかったらしい上に、余裕のある家庭ではなし、ことに、

——なまめかしいという感じを与える婦人ではなかった、艶つやはない、如何いかにもクスん

だ所のある人であつた、娘というよりは奥さんといったような人であつた。当時の

普通一般の女を離れて、男性の方に一步変化しかけたように感ぜられる婦人であつた。

挙止きよしは如何にもしとやかであつた。言葉はいかにも上品であつた。何処に女らしくな

いというところは挙げ得られないにかかわらず、何処となく女離れがしているように

感ぜられた。多分は一葉君の氣魄きはくの人を圧するようなどころがあつたからであらう。

要するに、共に語つて痛快な婦人の一人であつたらう。男が恋うることなしに親しく

交わりえられる婦人の一人だと私は思つていた。——馬場氏記——

とあるのから見ても、そうした婦人ひとで、並々の容色と見えれば、厚化粧で人目を眩惑げんわくさ

せる美女よりも、確かであるということが出来ようかと思われる。

その上に、もし一度興起ひとたびり、想漲みなぎり来つて、無我の境に筆をとる時の、瞳ひとみは輝き、青

白い頬ほおに紅潮のぼれば、それこそ他の模倣をゆるさない。引緊ひきしまつた面に、物を探る額の

曇り、キと結んだ紅い唇くちびる、懊惱おうのうと、勇躍とを混じた表情の、閃ひらめきを思えば、類型の美人

ということが出来よう。

誰に聞いても髪の毛は薄かったという事である。背柄せがらは中位であつたという。受け答えのよい人で話上手じょうずで、あつたとも聞いた。話込んでくると頬に血がのぼってくる、それにしがたつて話もはずむ。冷嘲れいちような調子のおりがことに面白かつたとかいう。礼儀たさいいので軀からだをこごめて坐っているが、退屈すると鬢びんの毛の一、二本ほつれたのを手のさきで弄いじり、それを見詰めながらはなす。話に油がのつてくると、間あいだをへだてていたのが、いつの間にか對手あいての膝ひざの方へ、真中にはさんだ火鉢ひばちをグイグイ押してくるほど一生懸命でもあつたという。

半日に一枚の浴衣ゆかたをしたてあげる内職をしたり、あるおりは荒物屋あらものやの店を出すとて、自ら買出しの荷物を背負せおい、ある宵よいは吉原よしわらの引手茶屋ひきてぢやに手伝いにたのまれて、台所で御酒おさけのおかんをしていたり、ある日は「御料理仕出し」の招牌かんばんをたのまれて千陰流ちかげの筆を揮ふるい、そうした家の女たちから頼まれる手紙の代筆をしながらも、

小説のことに従事し始めて一年にも近くなりぬ、いまだよに出したるものもなく、我が心ゆくものもなし、親はらかななどの、なれは決断の心うとく、跡のみかへり見ればぞかく月日ばかり重ぬるなれ、名人上手と呼べるゝ人も初作より世にもてはやさるゝべきにはあるまじ、非難せられてこそそのあたひも定まるなれと、くれ／＼せめら

る、おのれ思ふにはかなき戯作げさくのよしなしごとなるものから、我が筆とるはまことなり、衣食のためになすといへども、雨露しのぐための業わざといへど、拙なるものは誰が目にも拙とみゆらん、我れ筆とるといふ名ある上は、いかで大方のよの人のごと一たび読みされば屑籠くずかごに投げらるゝものは得えかくまじ、人情浮薄にて、今日喜ばるゝもの明日は捨てらるゝのよといへども、真情に訴へ、真情をうつさば、一葉の戯著といふともなどかは価のあらざるべき、我れは錦衣きんいを望むものならず、高殿たかどのを願ふならず、千載せんざいにのこさん名一時のためにえやは汚がす、一片の短文三度稿をかへて而しかして世の評を仰がんとするも、空しく紙筆のつひへに終らば、猶天命なみちと観ぜんのみ。

（一葉随筆、「森のした草」の中より）

おろかやわれをすね物といふ、明治の清少せいしょうといひ、女西鶴さいかくといひ、祇園ぎおんの百合ゆりがおもかげをしたふとさけび小万茶屋がむかしをうたふもあめり、何事ぞや身は小官吏おとむすめの乙娘おとむすめに生まれて手芸つたはらず文学に縁とほく、わづかに萩はぎの舎やが流れの末をくめりとも日々夜々の引まどの烟けむりこゝろにかかりていかで古今の清くたかく新古今のあやにめづらしき姿かたちをおもひうかべえられん、ましてやにほの海に底ふかき式部が学芸おもひやらるるままにさかひはるか也、ただいささか六つななつのおさな

だちより誰つたゆるとも覺えず心にうつりたるもの折々にかたちをあらはしてかくは
 かなき文字沙^ざたにはなりつ、人見なばすねものなどことやうの名をや得たりけん、人
 はわれを恋にやぶれたる身とやおもふ、あはれやさしき心の人々に涙そそぐ我れぞか
 し、このかすかなる身をささげて誠をあらはさんとおもふ人もなし、さらば我一代を
 何がための犠牲などこと／＼^し敷^くとふ人もあらん、花は散^{ちりとき}時あり月はかくる時あり、
 わが如きものが如くして過ぬべき一生なるに、はかなきすねものの呼^{よびな}名をかしうて、
 うつせみのよにすねものといふなるは

つま子もたぬをいふにや有らん

をかしの人ごとよな（一葉随筆、「棹^{さお}のしづく」より）

と、心を高く持っていたこの人のことを、私は自分の不文を恥じながらも、忠実に書かな
 ければならないと思う。ともかくも、私はまずこの人の生れた月日と、その所縁のつづき
 あいとを書落さぬうちにしるしておこう。

一葉女史は江戸つ子だ、いや甲州生れだという小さな口論争を私は折々聴いた。それはどっちも根拠のないあらそいではなかった。女史が生れたのは東京府庁のあった麹町の山下町に初声をあげた。明治五年には他にどんな知名の人が生れたか知らぬが、私たち女性の間には、ことに文芸に携わるものには覚えていてよい年であろう。数え年の六歳に本郷小学校へ入学した。その年は明治の年間でも、末の代まで記憶に残るであろう西南戦争のあった年で、西郷隆盛が若くから国家のために沸かした熱血を、城山の土に濺いだ時である。翌年の七歳には特に手習師匠にあがった。一葉女史の筆蹟が実に美事であるのも、そうした素養がある上に、後に歌人で千蔭流の筆道の達者であった中島師にいたからだ。十五年の夏には下谷池の端の青海小学校へ移り、その翌年に退校した。その後は他で勉強したとは公にはされていない。十九年になって中島歌子刀自の許へ通うまでは独学時代であつたろうと考えられる。

それまでが女史の両親の揃つていた勉強時代、少女時代で、甲州は両親の出生地であつた。父君は樋口則義、母君は滝といつて、安政年間に志をたてて共に江戸に出、母は稲葉家に仕え、父は旗本菊池家に奉公し、後に八丁堀衆（与力同心）に加わつた。そして維新後に生れた女史は、両親の第四子で二女である。甲斐の国東山梨郡大藤村は女史の

両親を生んだ懐かしい故郷なので。

小説「ゆく雲」の中には桂次けいじという学生の言葉をかりて、

我養家は太藤村の中萩原なかはぎわらとて、見わたす限りは天目山てんもくざん、大菩薩峠だいぼさつとうげの山々峰々

垣をつくりて、西南にそびゆる白妙しろたえの富士の嶺ねはをしまて面かげを覗しめさねども、冬

の雪おろしは遠慮なく身をきる寒さ、魚うおといひては甲府まで五里の道をとりにやりて、

やうく、鮪まぐろの刺身が口に入る位――

とある。その後の章には、

小仏こほとけの峠もほどなく越ゆれば、上野原、つる川、野田尻、犬目、鳥沢も過ぎて猿さるは

し近くにその夜は宿るべし、巴峽はきようのさけびは聞えぬまでも、笛吹川の響きに夢むす

び憂うく、これにも腸はらわたはたたるべき声あり勝沼はななよりの端書はがき一度とゞきて四日目にぞ七

里との消印ある封状二つ……かくて太藤村の人になりぬ。

と故郷の山野の景色がかなり細叙してある。

父則義氏は廿二年ごろに世を去られた。それからの女史の生活は流転をきわめている。

陶工であつた兄の虎之助氏は早くから別に一家をなしていたので、女史は母滝子と、妹の

国子と、かばそ疲細い女三人の手で、その日の煙りを立てなければならなかった。廿四年廿歳の時から廿九年までの六年間が製作の時代であつた。

生活の流転は、その感想、随筆、日記、が明らさまに語っている。女史の幼時にも彼女の家は転々した。本郷に移り下谷に移り、下谷御徒町おからまちへ移り、芝高輪たかなわへ移り、神田神保町かんだじんぼうちょうに行き、淡路町あわじちようになった。其処で父君を失つたので、その秋には悲しみの残る家を離れ本郷菊坂町きくざかちように住居した。その後下谷竜泉寺町したやりゅうせんじまへに移った。俗に大音寺前だいおんじまへという場処で、吉原の構裏かまえうらであつた。一葉の家は京町きやうまちの非常門に近く、おはぐろ溝どぶの手前側てまえがわであつたという。ここの住居の時分から、女史の名は高くなつたのである、そして生活の窮乏も極に達していた。荒物店あらものやをはじめたのも此家ここのことであれば、母上は吉原の引手茶屋で手のない時には手伝いにも出掛けた。女史と妹の国子とは仕立したてものの内職ばかりでなく、蟬表せみおもてという下駄げたの畳表たたみおもてをつくることもした。一葉女史のその家での書齋は、三畳ほどのところであつたという。荒物店の三畳の奥で、この閨秀けいしゆうの傑作が綴りだされようと誰が知ろう、それよりもまた、その文豪が、朝は風呂敷包みを背負つて、自ら多町たちようの問屋まで駄菓子を買出しにゆき、蠟燭ろうそくを仕入れ、羽織を着ているために嘲笑ちやうしやうされたと知ろうか。彼女の家から灯が暁近くなるまで洩れるのは、彼女の創作のた

めばかりではなかった。あの、筆をもてば、たちどころ倏忽に想をのせて走るとうと貴い指さきは、一寸の針をつまんで他家の新春の晴着はれぎを裁縫するのであった。半日に一枚の浴衣ゆかたを縫いあげるのはさして苦でもなかったらしいが、創作の気分の漲みなぎつてくるおりでも、米の代、小遣こづかい銭のために齷齪あくせくと針をはこばなくてはならなかったことを想像すると、わびしさに胸がぱいになる。明治廿五年の正月には、元日ですら夜まで国子氏と仕立物をしていたという事を日記が語っている。

国子当時せみおもて蟬表てきき職中一の手利に成たりと風説ありこよい今宵は例より、酒甘うましとて母君大いに酔給よひぬ。

——片町といふ所の八百屋やおやの新芋いものあかきが見えしかば土産にせんとて少しかふ、道をいそげばしとど汗に成りて目にも口にもながれているをはんけちもておしぬぐひくして——

とあるのにもその生活の一片が見られる。父の則義氏は漢学の素養もあり文芸の何物かをも知っていられたが、母君は普通の気量きがさな、かなり激しい気質の人であつたらしい。日記にあらわれた借財のことは、廿年の九月七日にはじまっている。そして、

——我身ひとつの故成ゆえなりせばいかゞいやしきおり立たちたる業ぎようをもして、やしなひ参らせ

ばやとおもへど、母君はいといたく名をこのみ給ふ質におはしませば、兎賤業をいとなめば我死すともよし、我をやしなはんとならば人めみぐるしからぬ業をせよとなんの給ふ、そもことはりぞかし、我両方^{わがふたかた}ははやく志をたて給ひてこの府にのぼり給ひしも、名をのぞみ給へば成りけめ。

とあるにも母君の面影が知れる。そうした氣位が高くていながら、乏しい暮しのために、しかもそうした堅氣^{かたぎ}の士族出が、社会の最暗黒面である廓^{さと}近くに住居して、場末の下層級の者や、流れ寄った諸国の喰詰^{くいづつ}ものや、そうでなくても闇^{やみ}の女の生血^{いきち}から絞りとる、泡^{あぶ}く銭^{ぜに}の下滓^{かす}を吸って生きている、低級無智な者の中にはさまれて暮していなければならなかった母君の、ジリジリした氣持ち——（氣勝^{きしょうもの}者）といわれる不幸^{ふしあわせ}な氣質は、一家三人の共通点であった。

一葉女史が近視眼だったのは、幼時土蔵の二階の窓から、ほんの黄昏^{たそがれ}の薄明りをたよりにして、草双紙^{くさごし}を読んだがためだという事ではあるが、そうした世帯の、細心^{ほそしん}の洋燈^{ランプ}の赤いひかりは、視力をいためたであろうし、その上に彼女は肩の凝る性分で、かつて、年若い女史にそう早く死の来ることなどは、誰人^{たれ}も思いよらなかったおり（死の六年前に）医学博士佐々木東洋氏が「この肩の凝りが下へおりれば命取りだから大事にせよ」と言わ

れたということなどを思つて見ても、早世は天命であつたかも知れないが、あまり身心を費消させた生活が、彼女の死を早めさせたのだ。

私は頃日、馬琴翁の日記を讀返して見て感じたのは、あの文人が八十歳にもなり、盲目にもなつていながら、著作を捨てなかつた一生が、女史のそれと同様に、焼火箸を咽喉もとに差込まれるような感じをさせることであつた。

女史の記録を讀むと、明治廿四年——（一葉廿歳の時）十月十日に兄の家は財産差押えになるという通知をうけたくだりに、金三円斗りもあれば破産の不幸にも至るまいという書状から推しても、杖とも頼む男兄弟の、たよりにならなかつたことがしれ、かえつて妹たちの方が苦しいなかからその急を救つた。

「家の方は私の稽古着を売つてもよいから」といつて、親子の膏であり、血となる代の金四円を、母を車に乗せて夜中ではあれど届けさせた。

ある時は貧に倦じた老女の繰言とはいえ、

「あな侘し、今五年さきに失なば、父君おはしますほどに失なば、かゝる憂き、よも見ざらましを我一人残りともまりたるこそかへす／＼口をしけれ、我詞を用ひず、

世の人はたゞ我れをぞ笑ひ指さすめる、邦も夏もおだやかにすなほに我やらむといふ
処、虎之助がやらむといふ処にだにしたがはゞ何条ことかはあらむ、いかに心をつく
りたりとて手を尽したりとて甲斐なき女の何事をかなし得らるべき、あないやいやか
かる世を見るも否也」

と朝夕に母に搔くどかれては、どれほどに心苦しかったであろう。おなじ年（廿六年四月
十三日の記に）、

母君更るまでいさめたまふ事多し、不幸の子にならじとはつねの願ひながら、折ふし
御心みこころにかなひ難きふしの有あるこそかなし。

とあるに知る事が出来る。

朝には買出しの包みを背負つて、駄菓子問屋の者たちから「姐さん」とよばれ、午後には
貴紳の令嬢たちと膝ひざを交えて「夏子の君」と敬される彼女を、彼女は皮肉に感じもした。
けれども恩師中島歌子は、一葉の夏子を自分の跡目をつぐものにしようとまで思っていた
のであった。であればこそ、同門の令嬢たちも、一葉という文名噴々と登る以前にも、
内弟子同様な身分である夏子を卑しめもしなかったものであろう。

ある時、女史は雨傘を一本も持たなかった。高下駄あしだの爪つま皮かわもなかった。小さい日和洋

傘で大雨を冒して師のもとへと通った。またある時は（新年のことであったと思う）晴着がないので、国子の才覚で羽織の下になるところは小切れをはぎ、見える場処にだけあり合せの、共切れを寄せて作った着物をきていったことがある。勿論裾廻しだけをつけたもので、羽織が寒さも救えば恥をも救い隠したのである。そうしても師の許へ顔をだす事を怠らなかつたわけは、他にもあるのであった。歌子は裁縫や洗濯を彼女の家に頼んで、割のよい価を支払らっていた。師弟の情誼のうるわしさは、あるおり、夏子に恥をかかせまいとして、歌子は小紋ちりめんの三枚重ねの引ときを、表だけではあったが与えもした。

「蓬生日記」の十月九日のくだりには、

師の君に約し参らせたる茄子を持参す。いたく喜びたまひてこれひる飯の時に食はばやなどの給ふ、春日まんぢうひとつやきて喰ひたまふとて、おのれにも半を分て給ふとあるにも師弟の關係の密なのが知られる。けれども歌子は一葉をよく知っていた。あるおり『読売新聞』の文芸担当記者が、当時の才媛について、萩の屋門下の夏子と龍子——三宅花圃女史——の評を求めたおり、歌子は、龍子は紫式部であり夏子は清少納言であらうと言ったとか、一葉も自分で、清少納言と共通するもののあるのを知っていたのかとも

思われるのは、随感録「棹さおのしづく」に、

少納言は心づからと身をもてなすよりは、かくあるべき物ぞかくあれとも教ゆる人はあらざりき。式部はおさなきより父為時がをしへ兄もありしかば、人のいもうととしてかずかずにおさゆる所もありたりけんいはゞ富家に生れたる娘のすなほにそだちて、そのほどほどの人妻に成りたるものとやいはまし——仮かり初そめの筆すさび成りける枕の草紙をひもとき侍るに、うはべは花紅葉もみじのうるはしげなることも二度三度見もてゆくに哀れに淋けしき氣こゝろぞ此中にもこもり侍る、源氏物がたりを千古の名物とたゞゆるはそれの時その人のうちあひてつひにさるものゝ出来いできにけん、少納言に式部の才なしといふべからず、式部が徳は少納言にまさりたる事もとよりなれど、さりとして少納言をおとしめるはあやまれり、式部は天つちのいとしごとにて、少納言は霜ふる野辺にすて子の身の上成るべし、あはれなるは此君やといひしに、人々あざ笑ひぬ。

と同情している。

とはいえその間に女史一代の天華は開いた。

「名誉もほまれも命ありてこそ、見る目も苦しければ今宵は休み給へ」
と繰返し諫める妹のことばもききいれず、一心に創作に精進しょうじんし、大音寺前の荒物屋

の店で、あの名作「たけくらべ」の着想を得たのであった。けれどもまた、漸く死の到来が、正面に廻つて来たのでもあったが、そうとは知りようもなく、ただ家の事につき、母を楽しませる事についても、一層氣掛りの度合が増したものと見え、彼女は相場をして見ようかとさえ思つたのだ。

私は此処まで書きながら、私も母の望みを満そうと、そんな考えを起した事が一再ならずあつたので、この思いたちが突飛ではない、全く無理もないことだと肯定する。その相場に関して、「天啓眞術本部」という、妙な山師のところへ彼女がいったことから、すこしばかり恋愛をさがしてみよう。

荒物店を開いた時のことも書残してはならない。

——夕刻より着類三口持ちて本郷いせ屋にゆき、四円五十銭を得、紙類を少し仕入れ、他のものを二円ばかり仕入れたとある。

今宵はじめて荷をせをふ、中々に重きものなり。

ともいい、日々の売上げ廿八、九銭よりよくて三十九銭と帳をつけ、五厘六厘の客ゆえ、百人あまりもくるため太多忙だと記したのを見れば、

なみ風のありもあらずも何かせん

ひと葉のふねのうきよなりけり

と感慨無量であつた面影が彷彿と浮かんでくる。

三

廿七年二月のある日の午後、本郷区真砂町卅二番地の、あぶみ坂上の、下宿屋の横を曲つたのは彼女であつた。その路は馴染のある土地であつた。菊坂の旧居は近かつた。けれども其処を歩いていたのは、謹厳深い胸に問いつ答えつして、様々に思い悩んだ末に、天啓顕真術会本部を訪れようとしていたのであつた。

黒堀の、櫟の植込みのある、小道を入つて、玄関に立つた彼女は、その家の主、久佐賀先生というのは、何々道人とでもいうような人物と想像していたのであろう。秋月と仮名して取次ぎをたのんだ。

彼女は久佐賀某に面接したおり、

(逢見ればまた思ふやうの顔したる人ぞなき)

と、『つれづれ草』の中にある詞を思出しながら、四十ばかりの音声の静かにひくい小男

に向合^{むき}つた。

鑑定局という十畳ばかりの室^{へや}には、織物が敷詰められてあり、額は二ツ、その一つには
 静心館と書してあり、書棚、黒棚、ちがい棚などが目^{めぐるし}苦いまでに並べたててあり、床^{とこ}
 の間^まには二幅^{にふくつ}対の絹地の画、その床を背にして、久佐賀某は机の前に大きな火鉢を引寄
 せ、しとねを敷いていて彼女を引見したのであつた。

「申^{まを}歳の生れの廿三、運を一時に試^{ため}し相場をしたく思えど、貧者一銭の余裕もなく、我
 力にてはなしがたく、思いつきたるまま先生の教えをうけたくて」

と彼女は漸くに口を切つた。それに答えた顕真術の先生は、

「実に上々のお生れだが金銭の福はない。他の福祿が十分にあるお人だ。勝^{すぐ}れたところを
 あげれば、才もあり智もあり、物に巧^{たくみ}あり、悟道の縁^{えに}もある。ただ惜むところは望^{のぞみ}が大
 きすぎて破れるかたちが見える。天稟^{てんぴん}にうけえた一種の福を持つ人であるから、商^{あきな}いを
 するときただけでも不用なことだと思ふに、相場の勝負を争うことなどは遮^{さへぎ}つてお止め
 する。貴女はあらゆる望みを胸中より退^{のぞ}いて、終生の願いを安心立命しなければいけない。
 それこそ貴女が天から受けた本質なのだから」

と言つた。彼女は表面^{つつま}慎しやかにしていても、心の底ではそれを聴いてフフンと笑つたの

であろう。

「安心立命ということは出来そうもありません。望みが大に過ぎて破れるとは、何をさしておつしやるのでしょうか。老たる母に朝夕のはかなさを見せなければならぬゆえ、一身を贅^{にえ}にして一時の運をこそ願え、私が一生は破^やぶれて、道^{みち}ばたの乞食^{こじき}になるのこそ終生の願いなのです。乞食になるまでの道中をつくるとて悶^{もだ}えているのです。要するところは、よき死^し処^{ところ}がほしいのです」

と言出すと、久佐賀は手を打っていった。

「仰^{おつ}しやる事は我愛する本願にかなっている」

彼女と久佐賀との面会は話が合ったのであろう。月を越してから久佐賀は手紙をもって、亀井戸の臥龍梅^{がりようばい}へ彼女を誘った。手紙には、

君が精神の凡ならざるに感ぜり、爾^{じらい}来したしく交わらせ給わば余が本望なるべし
などと書いたのちに、

君がふたゝび来たらせ給ふをまちかねて、として、

とふ人やあるところゝろにたのしみて

そゞろうれしき秋の夕暮

と歌も手も拙^{つた}ないが、才をもつて世を渡るに巧みなだけな事を尽してあつた。とはいへ、それを受けたのは一葉である。そんな趣向で手中にはいると思うのかと、直^{すぐ}に顕真術先生の胸中を見現^{みあらわ}してしまった。日本全国に会員三万人、後藤大臣並びに夫人（象次郎伯^{しょうじろう}）の尊敬^{ひとかた}一方でないという先生も、女史を知ることが出来ず、そんな甘い手に乗ると思つたのは彼れが一代の失策であつたであらう。

彼女は久佐賀の価値^{ねうち}を知つた。彼れは世人の前へ被^{かぶ}る面で、彼女も贏得^{かちう}ることが出来ると思つたのであらう。彼女の手記には利己流のしれもの、二度と説を聴けば、厭^{いと}うべくきらうべく、面に唾^{つば}きをしようと思ふばかりだとも言い、かかるともがらと大事を語るのは、幼子^{おさない}にむかつて天を論ずるが如きものだ、思えば自分ながら我も敵を知らざる事の甚だしきだと、自分をさえ嘲笑^{あざわら}つてゐる。けれども久佐賀の方では、自分の方は名と富と力を貯えているものだ、慢じていたのであらう。そしてその上に、一葉の美と才と、文名とを合せればたいしたものだと己惚^{うぬぼれ}たのであらう。他の者には洩^{もら}すのさえ恥^{はじ}ているだろうと思われる貧乏を、自分だけがよく知つてゐると思ひもしたのであらう。まだそれよりも彼女が親と妹のために、物質の満足を得させたいと願つてゐる弱みを、彼れは自分一人が承知しているのだと思ひ上つてゐた。そののみならず彼れは、一葉を説破しえたつもりで

いたかも知れない。

久佐賀は、金力を持つて、さも同情あるように附^{つけ}込んでゆこうとした。そうした男ゆえ、俺ならば大丈夫良かろうと錨^{いかり}をおろしてかかったのかも知れない。ともかく彼れはやんわりと、勝気なる、才女を怒らせないような文面をもつて求婚を申入れた。それは廿七年の六月九日のことで女史が廿三歳の時である。

（貴女の御困苦が私の一身にも引くらべられて悲しいから、御成業の暁までを引受けさせて頂きたい。けれども唯^{ただ}一面識のみでは、お頼みになるのも苦しいだろうから、どうか一身を私に委^{ゆだ}ねてはくれまいか。）

そんな風な申込に対して苦笑せずにいられるだろうか？　いうまでもなく彼女は彼れを評して、笑うにたえたしれもの、投機師と罵^{のの}っている。世のくだれるをなげきて一道の光を起さんと志すものが、目前の苦しみをのがれるために、尊ぶべき操^{みさお}を売ろうかと嘲笑した。とはいえ、救いは願っていたのである。そうした悲しい矛盾を忍ばねばならなかった貧乏は、彼女に女らしさを失わぬ返事を認^{した}めさせた。

（どうかそういう事は仰しやらないで、大事をするに足りるとお思いになるならば扶助をお与え下さい。でなければ一言^{ひとこと}にお断り下さい）

と彼女は明らかな決心を持って、とはいえ事の破れにならぬようと、余儀なく祈る返事を出した。その後も五十金の借用を申込んだこともある。久佐賀も彼女の家を度々訪ずれた。

久佐賀と懇意になつた後、^{のち}直に彼女の一家は本郷へ引移つた。荒物店を譲つて、丸山福山町の阿部家の山添いで、池にそうした小家へ移つた。其処は「守喜」という鰻屋の離れ座敷に建てたところで、狭くても氣に入つた住居であつたらしかつた。家賃三円にて高しといったのでも、質素な暮しむきが見える。現にこの間、^{あいだ}歌舞伎座で河合、喜多村の両優によつて、はじめて女史の作が劇として上場されたあの「濁り江」は、この家に移つてから、その近傍の新開地にありがちな飲屋の女を書いたものであつた。女史は其処に移つてからもそうした種類の人たちに頼まれて手紙の代筆をしてやつた。ある女は女史の代筆でなくてはならないとて、^{すきや}数寄屋町の芸妓になつた後もわざわざ人力車に乗って書いてもらいに来たという。「濁り江」のお力は、その芸妓になつた女をモデルにしたともいわれている。そしてそこが終焉^{しゅうえん}の地となつた。

引越しの動機が彼女の発起でないことは、

国子はものに堪忍^{たえ}ぶの氣象とぼし、この分厘にいたく厭^{あき}たるころとて、前後の慮^{おもんばかり}なく

やめにせばやとひたすら進む。母君もかく塵ちりの中にうごめき居らんよりは小さしといへど門構への家に入り、やはらかき衣類にても重ねまほしきが願ひなり、されば我もとの心は知るやしらずや、兩人とも進むこと切なり。されど年としごろ比売尽し、かり尽しぬる後の事とて、この店を閉ぢぬるのち、何方いずかたより一銭の入金のあるまじきをおもへば、ここに思慮めぐを廻らさざるべからず。さらばとて運動の方法をさだむ。まづかぢ町ちやうなる遠銀えんぎんに金子五十円の調達を申込む。こは父君存ぞんしょう生の頃よりつねに二、三百の金はかし置おきたる人なる上、しかも商法手広く表をうる人にさへあれば、はじめのこととて無情なさけなくはよもとかゝりしなり。

（「塵中日記」より）

私はもうこの辺で、その人のためには、茅屋ぼうおくも金殿玉楼と思ひなして訪といおとずれた、その当時はまだ若盛りであつた、明治文壇の諸先輩の名をつらねることも、忘れてならぬ一事だろうと、ほんの、当時の往来だけでもあつさり書いておこうと思う。

第一に孤蝶子——馬場氏が日記の中で巾はばをきかしている——先生の熱心と、友愛の情には、女史も心を動かされた事があつたのであろう。その次には平田秃木氏ひらたとくぼくであらう、こ

の二人のためにはかなり日記に字数が納められている。そしてこの二人の親密な友垣の間にあって、女史は淡い悲しみとゆかしさを抱いていたのであろう。

「水の上日記」五月十日の夜のくだりには、池に蛙かえるの声しきりに、燈影とうえい風にしばしばたたきとところ、座するものは紅顔の美少年馬場孤蝶子、はやく高知の名物とたたえられし、兄君たつ辰猪が気魂を伝えて、別に詩文の別天地をたくわゆれば、優美高潔かね備えて、おしむところは短慮小心、大事のなしがたからん生れなるべけれども歳は、廿七、一度跳おどらば山をも越ゆべしとある。

平田禿木は日本橋伊勢町の商家の子、家は数代の豪商にして家産今漸ようやくかたぶき、身に思うこと重なるころとはいえ、文学界中出色の文士、年齢は一の年少にして廿三とか聞けり。今の間に高等学校、大学校越ゆれば、学士の称号目の前にあり、彼れは行水ゆくみずの流れに落花しばらくの春とどむる人であらうといい、（親密々々）これは何の言葉であらうと言ひ、情に走り、情に酔う恋の中に身を投げいれる人々と、何気なくは書いているもの、更ふけて風寒く、空には雲のただずまい、月の明暗する窓によりて、沈黙する禿木氏と、燈と火もしびの影によく語る孤蝶子との中にたつて、茶菓さかを取まかなっていた女史の胸は、あやしくも動いたのであろう。

此処へ川上眉山氏びざんがまた加わらなければならない。彼女は初めて逢った眉山氏をどう見たろうか、彼女はこう言っている。

年は廿七とか、丈高くたけ、女子の中にもかゝる美しき人はあまた見がたかるべし、物言ひ打笑うちえむとき頬のほどさと赤うなる。男には似合しからねど、すべて優形やさがたにのどやかなる人なり、かねて高名なる作家ともおぼえず心安げにおさなびたり。

とて、孤蝶子の美しさは秋の月、眉山君は春の花、艶えんなる姿は京の舞姫のようにて、柳やなぎの歌妓たけにも譬たとえられる孤蝶子とはうらうえだと評した。

馬場氏の思いなげに振舞うのが、禿木の気を悪くするのであらうと、侘わびしげにも言っている。そして眉山氏も一葉党の一人になってしまった。禿木は孤蝶子との間に疑いを入れて、ねたましげでもあつたであらう。それもそのはずで、

孤蝶子よりの便りこの月に入りて文三通、長きは巻紙六枚を重ねて二枚切手の大封おおふうじなり。

とある。同じ中に、

優なるは上田君ぞかし、これもこの頃打しきりてとひ来る。されどこの人は一景色ひとけしきことなり、万よろずに学問のほひある、洒落しゃらくのけはひなき人なれども青年の学生なれば

いとよしかし

とあるは、柳村、敏博士びんのことである。その他に一葉の周囲の男性は、戸川秋骨とがわしゅうこつ、島崎藤村、星野天知てんち、関如来にやらい、正直正太夫しやうじきしやうだゆう、村上浪六なみろくの諸氏が足近かつた。

正太夫は緑雨りよくうの別号をもつ皮肉屋である。浪六はちぬの浦浪六と号して、撥鬢奴ばちびんやつこ小説で溜飲りゆういんを下げてしかも高名であつた。渋仕立しぶじだての江戸っ子の皮肉屋と、伊達小袖だてこそでで寛濶の俠氣を売物の浪六と、舞姫のように物優しい眉山との三巴みつどもえは、みんな彼女を握ろうとして、仕事を巧みすぎて失敗した。眉山は強いて一葉の写真を手に入れたのちに、他から出た噂うわさのようにして、眉山一葉結婚云々と言触いふふらしたのでうとまれてしまった。

正太夫年齢は廿九、痩せ姿の面やうすご味を帯びて、唯口許くちもとにいひ難き愛敬あいきようあり、綿銘仙めんめいせんの縞しまがらこまかき袷あわせに木綿もめんがすりの羽織は着たれどうらは定めし甲斐絹かいきぬなるべくや、声びくなれど透通すきれるやうの細くすずしきにて、事理明白にものがたるかつて浪六がいひつるごとく、かれは毒筆のみならず、誠に毒心を包蔵せるのなりといひしは実に当れる詞ことばなるべし

と評した斎藤緑雨を、そう言ったほど悪くはあしらいもしなかった。かえって二人は人かと思うより気が合つた。皮肉屋同士は会心の笑みをうかべあいもした。妻帯の事についても

かなり打明けて語りあっている。でありながら最後に（彼れの底の心は知らぬでもない）と冷たくあしらったのは、あまり正太夫が自分の筆になる鋭利な小説評が、その当時の文壇の勢力を左右した力をもつて、折々何事にもあれ一葉の行方を差示し顔に、その力量をほのめかして、感得させようとしたのから、反抗を買ってしまった。浪六にはその前年から頼んであつた金策のことで、大晦日の夜も待明したのであつたが、その年の五月一日になつてもまだ絶えて音信をしなかつたので、

誰もたれも言ひがひのなき人々かな、三十金五十金のはしたなるに夫をすらをしみて出し難しとや、さらば明かに調べがたしといひたるぞよき、えせ男作りて、髭かき反せどあはれ見にくしや

と吐きだすように言われている。その他に樋口勘次郎は、身は厭世教を持したる教育者で、しかも不娶主義の主張者でありながら、おめもじの時より骨のなき身になつたといつて、勿体なくも君を恋まつれる事幾十日、別紙御一覽の上は八つぎきの刑にも処したまへとて熱書を寄せもした。されば、

にくからぬ人のみ多し、我れはさは誰と定めて恋渡るべき、一人のために死なば、恋しにしといふ名もたつべし、万人のために死ぬればいかならん、知人なしに、怪し

うこと物にやいひ下されんぞそれもよしや。

と思慕の情を寄せてくれる人々に対して誠を語っている。とはいえ、それは思われるに對してである。物思う側の彼女をも、思われた唯一ただ一人の幸福者をも記しるそう。

四

さても、さほどまでに多くの人々に懐かしまれた女史の、胸の隠おく処に秘めた恋は、片恋であつたであらうか、それともまた、互に口に出さずとも相恋の間柄であつたであらうか。日記に見える女史の心は動揺している。すくなくとも八分の弱身はあつたように見られる。はじめから女史はその人を恋人として見たのではない。最初は小説の原稿を見てもらうために、先生として逢い、同時に、原稿を金子きんすに代えることも頼んだのだ。その人の友達が一葉の友でもあつたので、二人を紹介したのがはじめだった。ところが、その人は、友達のように親しく一葉に同情し、友達よりも深い信実心まじこころを示した。いかほど用心深い性質さがでも、若い女には若い血潮が盛られている。十九の一葉はその人を心から兄と思ひ慕つた。そしてその慕わしきは恋心となつた。

「よもぎふ日記」二十六年四月六日の記に、

こぞの春は花のもとに至恋の人となり、ことしの春は鶯うぐいすの音に至恋の人をなぐさむ。

春やあらぬわが身ひとつは花鳥の

あらぬ色音にまたなかれつゝ

とある末に、

もゝのさかりの人の名をおもひて、

もゝの花さきてうつろふ池水の

ふかくも君をしのぶころかな

とある。桃の花のうつらう水というのこそ、彼女の二なき恋人の名なのである。その人こそ現今いまも『朝日新聞』に世俗むきの小説を執筆し、歌うた沢寅千代の夫君として、歌沢の小唄うたを作りもされる桃水とうすい、半井氏なからいのことである。

半井氏を一葉はどれほど思っていたであろうか、そして半井氏は――

昔時むかしは知らずやや老いての半井氏は、訪客の談話が彼女の名にうつると、迷惑そうな顔をされるといふことである。そして一ことも彼女については語らぬといふことである。関如来氏の談によれば、ある日朝から一葉が半井氏を訪ねたことがある。彼女の声が、訪れ

たということを格子戸の外から告げられると、二階に執筆中の半井氏は不在だと言ってくれと関氏に頼んだ。関氏が階下へおりてゆくと、彼女は上つて坐つて待つていた。関氏は何時も彼女の家を絶えずおとずれる訪客の一人であつて、いつも彼女に饗応をうける側の人であつたので、こういう時こそと、自らが主人気取りで、半井氏が留守ならばとしきりに暇を告げようとする女史を引止めたうえに、鯨などまでとつて歓待した。そして午ごろまで語りあつた。階上の半井氏は、時がたつにしたがつて、階下に用事があるようになつたが、さりとて留守と言わたのでおける事は出来ず、人を呼ぶことは出来ず、その上灰吹をポンとならして煙管をはたくのが癖であることを、彼女がよく知っているの、そんな事にまで不自由を忍ばなければならなかつたので、彼女が辞し去つたあとで、こんな事ならば逢つて時間をつぶした方がよかつたと言ひたいといふことである。その一事をもつて総ての推測を下すのではないが、憎くはないがこの女一人のためには、何もかも失つてもと思ひ込むほどの熱情は、なかつたのであろう。その、どこやら物足らなさを、彼女の魂の中の暴君が、誇を疵つけられたように感じ、恋もし、慕いもしたが、また悔みもした。

勝気の女はかなしかつた。女人の誇りを、恋人の前でまで、赤裸に投捨てられないもの

の恋は、かなしいが当然で、彼女は自ら火を点けた焰を、自らの冷たさをもつて消そうと争った。

彼女の恋愛記は成恋でもなければ勿論失恋でもない。恋というものに対して、自らの魂のなかで、冷熱相戦った手記であると同時に、肉体と靈魂との持久戦でもあった。彼女もまた旧道徳に従つて、秘に恋に苦しむのを、恋愛の至上と思つていたらしい。

彼女を恋に導いた友達——野々宮某女は、思いあがつた彼女の誇りを利用して、巧みに離間しようとして成功した。とはいえ、その実それは、一葉自身の弱点でもあった。

恋するものの女らしさ——私はそう思う時に女心の優しさにほほえまずにはいられない。それは彼女が初めて島田鬻に結つた時のことである。その日彼女が半井氏を訪れたのは、人の口に仇名がのぼり、あらぬ名をうたわれるのを憤つて、暫時、絶交しようと思つての訪問であつた。そうした日であるのに、珍らしくも一葉は島田鬻の初結をした。その日は二十五年六月二十五日のことである。

「しのぶぐさ日記」には、

梅雨降りつゞく頃はいと侘し、うしがもとはいと子君伯母君二処居たり、君は次の間の書室めきたるところに打ふし居たまへり。雨いたく降りこめばにや雨戸残りなく

しめこめていと闇^{くら}し、いと子君伯母なる人に向ひて、御覧^{ごらん}ぜよ樋口さまのお髪^{ぐし}のよきこと、島田は実によく似合給へりといへば、伯母君も実に左^さなりく、うしろ向きて見せたまへ、まことに昔の御殿風と見えて品よき髻^髷の形かな。我は今^{いま}様の根^{よう}の下りたるはきらひなどいひ給ふ。半井君つと立^{たち}て、いざや美しうなりたまひし御姿みるに余りもさし込めたる事よとて、兩戸二、三枚引あく、口の悪き男かなとて人々笑ふ。我もほゝゑむものから、あの口より世になき事やいひふらしつると思ふにくらしさに、我しらずにらまへもしつべし。

とある。けれども、何のためにさまで憎く思つたかといえ、その前日、彼女が師の家に同門の友達と雑談にふけたおり、誰彼の噂^{うわさ}に夜をふかすうちに、姦^{かしま}しきがつねとて、誰にはかかる醜行あり、彼れにはこうした汚行ありと論^{あげ}つらうを聞いて、彼女はもう臥床^{ふしど}に入ろうとした師歌子の枕許^{もと}へいつて身の相談をしようとした。それは、それより前の日に、伊藤夏子という人が席を立て一葉をものかげに呼び、声をひそめて、
「貴女は世の中の義理の方が重いとお思ひなさるか、それとも御家名の方が惜^{おし}いと思ひなさるか」

と聞かれたので、

「世の義理は重んじなければならぬものだと思ひます。けれども家の名も惜くないことはあります。甲乙がないといいたいけれど、どうも私の心は家の方へ引かれがちです。何故^{なぜ}というのに、自分ばかりのことでなく、母もあれば兄^{きょうだい}妹もあるの」と答えた。

「では言わなければならぬことでありますが、貴女は半井さんと交際を断つ訳にはいかないでしようか」といった。

彼女は友の視線があまりまぶしいので、何事と知らねど胸の中にもものたたまるように思われた。

「妙なことを仰しやるのね。それは何時^{いつ}ぞやもお咄^{はなし}したとおり、あの方は年齢^{とし}も若いし、美しい御顔でもあるし私が行ったりするのは、憚^{はば}からなけりやなるまいと思つています。幾度交際を断とうと思つたかも知れはしません。けれど受けた恩義もあり、そうは出来かねているのよ、私というものの行いに、汚れのないのを御存知でありながら……」

と彼女は怨^{うら}みもした。

「そりやあ道理はそうですけれど——まあ訳はいずれ話しますが、どうしても交際が断て

ないというのならば、私でも疑うかもしれませんよ」

そういつて友は立別れた。一葉は、ふとその日の訝しい友の言葉^{いぶか}を思い出したので、歌子によつてその惑いを解いてもらおうとしたのであつた。

「半井さんの事は先生がよく御承知であつて、訪問をお止めにならないのを、何ぞ噂するのでございましょうか」

と歌子にたずねた。すると歌子の返事は、実に意外に彼女の耳に鳴り響いた。

「では、行末の約束を契つたのではないのか」と。

彼女は仰天して、七年の年月を傍においた弟子の愚直な心を知らないのかと、怨み泣いた。

「でも、半井氏という人は、お前は妻だと言触^いらしているというではないか。もし縁があつてゆるしたのならば、他人がなんと言おうとも聞入れないがよい。もしそうでないのならば、交際しない方がよいだろう」

と歌子は諭^{さと}した。それ故にこそ彼女は梅雨の日を訪ずれたのである。そして、絶交する人の目に、島田に結んだ姿を残そうとしたのである。

愛するあまりに、妻とも言つたであらうかの恋人に、その故に絶交しなければならぬ

彼女は、たった一月前には思う人の病を慰めるためにと、乏しい中から下谷の伊予紋（料理店）へよって、口取りをあつらえたり、本郷の藤村へ立寄って蒸菓子を買いととのえたりして訪れていた。ある時は、朝早くから訪れて午過ぎまで目ざめぬ人を、雪の降る日の玄関わきの小座敷につくねんと、火桶もなく待あかしていたこともあった。彼女が手伝つて掃除すると、まめやかな男主は、手製のおしるこを彼女にと進めたりした。彼女はその日のことを記した末、

半井うしがもとを出しは四時ころ成りけん、白皚々たる雪中、りん／＼たる寒氣をおかして帰る。中々おもしろし、堀ばた通り九段の辺、吹かくる雪におもてむけがたくて頭巾の上に肩かけすつぽりとかぶりて、折ふし目斗さし出すをかし、種々の感情にせまりて、雪の日といふ小説の一篇あまばやの腹稿なる。

とある。恋に対して傲慢であつた彼女にも、こうした夢幻境もあった。恋という感想に、我ははじめよりの人に心をゆるしたることもなく、はた恋し床しなどと思ひつることかけてもなかりき。さればこそあまたたびの対面に人げなき折々はそのことゝもなく打かすめてものいひかけられしことも有しが、知らず顔につれなうのみもてなしつるなり。さるを今しもかう無き名など世にうたはれて初て処せくなりぬるなん口惜しと

も口惜しかるべきは常なれど、心はあやしき物なりかし、この頃降りつゞく雨の夕べ
 などふと有し閑居のさま、しどけなき打とけたる姿などそこともなくおもかげに浮び
 て、彼の時はかくいひけり、この時はかう成りけん、さりし雪の日の参会の時手づか
 ら雑煮にて給はりし事、母様の土産にしたまへと、干魚の瓶漬送られしこと、我参る
 度々に嬉しげにもてなして帰らんといへば今しばし君様と一夕の物語には積日の
 苦をも忘るるものを、今三十分二十五分と時計打眺めながら引止められしことまして
 我ためにとて雑誌の創立に及ばれしことなどいへば更なり、久しう病わづらひ給ひその後
 まだよわよわと悩ましげながら、夏子さま召上りものは何がお好きぞや、この頃の病
 のうち無聊ぶりようたえ堪がたく夫それのみにて死ぬべかりしを朝な夕なに訪ひ給ひし御恩何にか比
 せん、御礼には山海の珍味も及ぶまじけれどとて、兄弟などのやうにの給ふ。我料理
 は甚だ得手なり殊に五もくずし調ずること得意なれば、近きに君様正客にしてこの御
 馳走ちそう申すべしと約束したりき。さるにてもその手づからの調理ものは、いつのよいか
 にして賜はることを得べきなど思ひ出いづるまゝに有しこと恋しく、世の人のうらめしう、
 今より後の身心ぼそうなど取あつめて一つ涙ひぬものから、かく成なり行ゆきしも誰ゆゑか
 は、その源はかの人みづから形もなき事まぎ／＼言触しうしたればこそ……

とあるが、その実は野々宮某という女友達の嫉妬しつとから言触らされたのを知らなかったのである。

彼女は恋人から離れたと思い信じたが、彼女の心はそうゆかなかった。或時は、

吹風のたよりはきかじ萩おぎの葉の

みだれて物を思ふころかな

とまで思い乱れ、またある時は伯父おじの病床に侍して（かゝる時の折ふしにも猶彼なほの人を忘れ難きはなぞや）といい、ある時は用もなきに近き路みちをえらんでゆき、その人の住む家の前を通りて見、その家の下女げじょに行逢ゆきあいて近状を聞き、（万感万嘆この夜睡ねむることかたし）と書いたのは、彼女の青春二十一歳のことであった。次の年の一月二十九日雪の降るのを見つつ、

わが思ひ、など降る雪のつもりけん

つひにとくべき中にもあらぬを

と嘆き四月の雨の日の記には、

わが心より出たるかたちなればなどか忘れんとして忘るゝにかたき事やあると、ひたすら念じて忘れんとするほど、唯身にせまりくるがごとおもかげのまのあたりに見え

て得堪^えゆべくも非^{あら}ず、ふと打みじろげばかの薬の香のさとかをる心地して思ひやる心
 や常に行通ふとそゞろおそろしきまでおもひしみたる心なり、かの六条の御息所^{みやすどころ}の
 あさましさを思ふにげに偽りともいはれざりける。

おもひやる心かよはゞみてもこん

さてもやしばしなぐさめぬべく

恋は、

見ても聞きてもふと思ひ初^そむるはじめいと浅し、

いはでおもふいと浅し、

これよりもおもひかれよりも思はれぬると浅し、

これを大方^{おおかた}のよに恋の成^{じょうじゆ}就^{しゅう}とやいふならん、逢^{あい}そめてうたがふいと浅し、

わすられてうらむいと浅し、

逢んことは願はねど相思はん事を願ふいと浅し、

名取川^{なとりがわ}瀬々のうもれ木あらはればと人のため我ためをしむたぐひ、うきに過たる

年月のいつぞは打とけてとはかなきをかぞへ、心はかしこに通ふものか、身は引離れ

てことさまになりゆく、さては操を守りて百年もとせいたづらぶしのたぐひ、いづれか哀れならざるべき、されど恋に酔ひ恋に狂ひ、この恋の夢さめぎらんなかなかこの夢のうちに死なんとぞ願ふめる、おもへば浅きことなり——誠入いりたち立ぬる恋のおくに何物かあるべきもありといはゞみぐるしく、憎く、憂く、愁くつら、浅間しく、かなしく、さびしく、恨めしく取つめていはんには厭いとわしきものよりほかあらんとも覺おぼえず、あはれその厭ふ恋こそ恋の奥なりけれ……

彼女の恋の信仰は頑固であつた。彼女は何処までも人生のほろにがさを好んだ。

暖かくなしい心持を抱いだいて歸つた雪の途中で出来上つた小説「雪の日」は、その翌年に発表された。十六になる薄井うすいの一人娘お珠たまが、桂木かつらぎ一郎という教師と家出をしたというのが筋である。「媒なかつは過し雪の日ぞかし」ともあれば「かくまでに師は恋しかりしかど、ゆめさらこの人を夫と呼びて、俱ともに他郷の地をふまんとは、かけても思ひよらざりしを、行方なしや迷ひ……窓の呉竹くれたけふる雪に心下折れて、我も人も、罪は誠の罪になりぬ」とある。言わずともわが身——世馴よなれぬ無垢むくの乙女おとめなればこうもなろうかと、彼女自身がそうもなりかねぬ心の裏うちを書いて見たものと見る事が出来よう。

彼女は恋に破れても名には勝った。困窮は堪忍び得たが病苦には打敗てしまった。彼女の生存の末期は作品の全盛時にむかつていた。『国民の友』の春季附録には、江見水蔭、星野天知、後藤宙外、泉鏡花に加えて彼女の「別れ路」が出た。評家は口をそろえて彼女を讃えた。世人はそれを「道成寺」に見たて、彼女を白拍子一葉とし、他のものを同宿坊と言伝えたほどであつた。それは二十九年一月のことである。その年の四月には咽喉が腫れ、七月初旬には日々卅九度の熱となつた。山竜堂、樗村博士も、青山博士も医療は無効だと断言した。十一月の三日ごろから逆上のために耳が遠くなつてしまった。そして二十三日午前に逝去した。かつて知人の死去の通りに持参する香奩がないとて、

我こそは達磨大師になりにつれとぶらはんにもあしなしにして

といい、また他行のため洗張りさせし衣を縫うに、はぎものに午前だけかかり、下まゑのえり五つ、袖に二つはぐとて、

宮城のにあらぬものから衣なども木萩のしげきなるらん

と恬然と一笑した人の墓石は、現今も築地本願寺の墓地にある。その石の墓よりも永久に残るのは、短い五年間に書残していった千古不滅の、あの名作名篇の幾つかである。

昭和十年末日附記 隨筆集『筆のまにま』は、佐佐木竹柏園^{ちくはくえん}先生御夫妻の共著だが、その一二五頁「思ひ出づるまにま」大正七年六月の一節に「自分がいつか夏目漱石さんの所へ遊びに行つて昔話などをした時、夏目さんが、自分の父と一葉さんの父とは親しい間柄で、一葉さんは幼い時に兄の許嫁^{いいなずけ}のようになっていた事もあったと言われた。明治の二大文豪の間に、さる因縁があつたとは面白いことである」とあつた。

青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（上）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年11月18日第1刷発行

2001（平成13）年7月9日第5刷発行

底本の親本：「近代美人伝」サイレン社

1936（昭和11）年発行

初出：「婦人画報」

1918（大正7）年6～8、10月

入力：小林繁雄

校正：門田裕志

2006年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

樋口一葉

長谷川時雨

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>